釧路むすび塾　＠大楽毛地区

道路に雪 冬場は危険
国道や線路 横断困難

むすび塾は、町内会役員ら7人が、「カケアガレ！日本」の訓練や、東日本大震災で被災した東北学院大4年の渡辺美莉さん（22）、東北電機製造（多賀城市）社長の椎井一意さん（64）、石巻地区消防本部主査の野田和好さん（45）の体験談などを基に、地域の備えについて話し合った。震災・復興支援機構（東京）の菅下加奈専務理事、東北大災害科学国際研究所の安倍祥助手も議論に加わり、住民ら約30人が話に耳を傾けた。

カケアガレ 課題は

カケアガレについては、スムーズな訓練を評価する声が上がった一方、道路が雪に覆われる冬場の対応や、遠方への徒歩避難、車で国道や線路を横断する避難路がないことに不安を訴える声が相次いだ。

大楽毛地区連合町内会長の中村英さん（76）は「信号が停電で止まってしまうような非常時、車が走っている国道を横断できるのか大きな問題だ」と述べる。内陸への一方通行ではなく、2会場（避難）と述べた。

国道38号は高台が多く北西方向に逃げる車で混雑した。

機構の木村拓郎理事は、緊急時の特別ルールを行政や民間業者で定め、住民の横断路を確保する方法を提案。「一方で、渋滞緩和策として、震災では片側1車線で内陸から海へ向かう道路はないていたとの証言もある。実際に東日本大震災では、国道38号は高台が多く北西方向に逃げる車で混雑した。

今後の訓練について、安倍助手は「実際はいろいろな方向から車が進入し、進路を妨害する場もある」と問題提起した。

避難先の中で最も内陸部にあり、約3キロ離れた北海道鶴野支援学校までは30分近くかかったため「限られた時間内に、歩いて逃げるのは厳しい」と話す住民もいた。

訓練で車いすを押した南町内会婦人部長の島谷まき子さん（64）は「会場は足元が悪くなる。住民からは「隣の人を置き去りにして自分だけ逃げられない」「要援護者の中には訓練すら遠慮する人もいる」と戸惑いの声が上がった。

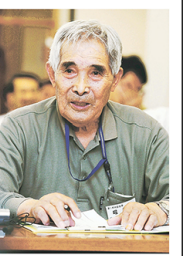
「少しでも早く避難行動を始めれば、共助の時間をつくれる」と強調した。

菅下専務理事は、介助が必要な高齢者らと普段から話し合い、遠慮のない関係を築くことが大切だ」と助言した。

車と徒歩、車いすを組み合わせた避難行動を試みた津波避難訓練。ワークショップでは住民らが、訓練を振り返った

■むすび塾に参加して

北海道・釧路市大楽毛地区



大楽毛地区では海岸から20～30分の場所に家を構える住民もいるが、現状では津波への危機感や避難への意識は高まっていない。避難場所への経路を記憶したり、混雑する緊急道路の特徴を知ったりすることは重要。「むすび塾」で学んだ知識を町内会の危機管理に活かしたい。

＝第1町内会長・堀耕一さん（89）

町内会役員のうち副会長が70歳代以上の高齢者で、足腰の弱い人が多い。避難するよう説得し家から連れ出しても、車でなければ逃げられない。むすび塾で防災対策を詰めないことが大事との助言を得た。高齢化が進む地域で考え合う態勢をどう守るのか、考え続けなければならない。

＝南町内会長・向後芳昭さん（74）

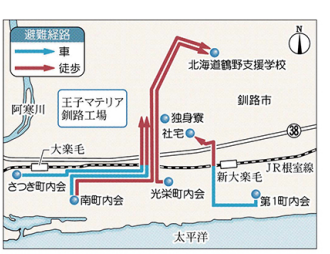
東日本大震災の日、釧路市でも津波が川をさかのぼったが、近所で誰も逃げなかったそれを見て私も逃げなかった。震災後、地域のお年寄りの家を訪問し、毎月、声掛けしている。顔見知りになっていると避難でも役立つ。危機感を持って暮らすのは疲れるが、勉強しながら防災に臨みたい。

＝南町内会婦人部長・島谷まき子さん（64）

大楽毛地区には高い建物がなく、線路や国道を横断する避難は時間を要する。釧路市に要望している避難タワーの建設を進まなければ、諦めることはできない。ただこのタワーの整備には時間がかかる。まずは内陸避難を目的の前提として取り組もうと、町内会の人たちに伝えたい。

＝南町内会防災委員部長・吉田登子さん（61）

避難完了目標 30分以内



津波避難訓練「カケアガレ！日本」には、海に近い4町内会の住民31人が参加した。グループに分かれ、30分以内の避難完了を目標に利用車や徒歩、車いすで避難先を目指した。

訓練は、午後0時50分に北海道太平洋沖を震源とする巨大地震が発生、午後1時に大津波警報が発令され、釧路市沿岸部には30分後に10㍍の巨大津波が到達すると想定した。

南町内会の女性4人グループは要援護者を連れ、車と徒歩を組み合わせた2度目の逃げに臨んだ。

一行は避難開始直後、2分ほどたって車いすを車に積み込んだ後、約2㌔離れた王子マテリア釧路工場独身寮に向けて移動を始めた。国道沿いで渋滞が発生したと想定し、JR根室線の踏切で降車、車いすに要援護者を乗せて、徒歩に切り替えた。

国道38号では赤信号で1分ほど足止めを余儀なくされ、横倒した街灯、未舗装の歩道、大きな段差や乏生を車いすで進んだ。

独身寮に着いたのは、出発から18分後。町内会婦人部長の島谷まき子さん（64）は「舗装されていない道や乏の上で、車いすを押すのは大変だった。日中なので段差を避けたが、暗い中で避難したら気付かないまま転倒したかもしれない」と振り返った。

要援護者や高齢者を除き、ほとんどの住民が階建ての独身寮屋上へ階段を上った。建物には矢印で屋上への経路が表示され、従業員が誘導に当たった。

別の男女のグループ4人は、約3㌔離れた北海道鶴野支援学校に徒歩で向かった。女性の一人は途中の独身寮で歩くのをやめ、列から離れた。残る3人は、目標ぎりぎりの29分30秒で同校に到着した。

町内会長の向後芳昭さん（74）は、同校にたどり着くなり、地べたに座りこんだ。「普段ウオーキングしているが、3㌔を歩いて避難するのは体力的に厳しい。高齢者の足ではもっと大変だろう」と話した。

津波避難訓練に参加者はグループごとにウオッチを使って避難先への移動時間を計測した

東北大災害科学国際研究所助手　安倍祥さん

車の避難経路 複数用意を

地震発生から41分後の津波を想定した訓練は、総じてスムーズだった。

ただし、今回は避難手段や経路を準備した状態で始まった。実際は夜間や冬季後は、避難を妨げるいろいろな要素を、訓練のたびに取り入れ、改善する必要がある。

大楽毛のように高い建物のない平野部では、車の避難経路をいくつか用意しておくことも大切だろう。

要援護者がいる世帯の把握や訓練への参加は、各地で課題になっている。要援護者本人が難しい場合は、家族が訓練に参加するなどでも備えにつながる。

「津波てんでんこ」の考えも東日本大震災後に全国に広がる「一方、自身の避難と共助の兼ね合いに悩む人も多い」と聞く。

津波被害が発表されるようになり、昔よりも早く情報が得られる。その分の時間を、地域で声を掛け合ったり要援護者を助けに行ったりする共助に活用し、最終段階で逃げるというのが、現代の「てんでんこ」ではないだろうか。

みなさんには、限りある時間で助け合い、命を守るすべをまさまざまな視点で考えてほしい。

車いす 未舗装路に苦戦／長距離 高齢者歩けない